

ウクライナ和平合意を急げ

――トランプ・プーチン会談で方針を大転換――

ジオポリ・グローバル・アラート（GGA）

2025 年 8 月 17 日第 9 号（通算第 269 号、創刊 2003 年）

○ 「停戦より迅速な和平合意を」（トランプ氏が翻意）

15 日（現地）トランプ大統領はアラスカ首脳会談からワシントンに戻る途中、大統領専用機「エアフォースワン」からゼレンスキー大統領や NATO 首脳らに電話をかけ、「迅速な和平合意が停戦よりも良い」と述べた（米 WEB 情報サービスの AXIOS）。トランプ・プーチン会談に同席していたルビオ国務長官とホワイトハウス特使のウィトコフ氏も電話に同席していた。

トランプ氏は、プーチン大統領は停戦を望んでおらず、戦争を終わらせる「包括的合意」を望んでいると語った。

トランプ氏はまた、ゼレンスキー氏に対して「プーチン氏は、ロシアが前線を拡大して、もし望むならドネツク州全域を含む他地域を制圧できる」と伝えた。

しかし、ゼレンスキー氏はトランプ氏に対し、プーチン氏は前線の状況把握を誤って伝えたと言及し、ウクライナ戦争観について二人の認識差が拡大していた。

アラスカ首脳会談を契機に、トランプ氏は当初のアプローチとは真逆の和平論を宣言した。トランプ氏は翻意した。他方、この点について、ゼレンスキー氏は、和平交渉の前に停戦が必要だと一貫して主張してきた。

そこでいま一度、プーチン氏一行がアラスカ入りした 15 日に時計の針を戻した上、状況の推移について若干の整理を試みる。

○ リムジンに相乗り ひざ詰め協議

8 月 15 日（現地時間）、トランプ大統領は、アラスカ州アンカレッジのエルメンドルフ・リチャードソン統合基地で、B-2 爆撃機の飛行やレッドカーペットでのプーチン大統領の歓迎を行った（写真＝左）。



ところで、トランプ氏とプーチン氏は基地から主要交渉会場へ向かう途中、米大統領専用リムジンの愛称「ビースト（野獣）」内での一対一の会談を行った（写真＝右、ロイター）。約 10 分間の通訳を介さない真のひざ詰め会談だった。

付近にはモスクワのナンバープレートを付けた車が待機していた。相乗りはトランプ氏の思いつきだったのだろう。

「肝胆相照らす仲」と自任するトランプ氏の最高のおもてなしの一つとも言えるが、このひざ詰め談判は首脳会談の行方に大きな影響を与えたことが直ぐ分かった。

この異例の相乗りは外電で世界中に知れて、ロシアのリーダーが国際外交への復帰を果たしたことを一瞬のうちに印象づけた。訪米はプーチン氏にとっての勝利に他ならなかった。

首脳会談は約 3 時間にわたり、双方 3 名ずつによる小グループでの協議を含んだ。

ロシア側からはウシャコフ大統領補佐官とラブロフ外相が、米国側からはルビオ国務長官とウィトコフ大統領特使がそれぞれ参加した。

○ 「歴史的な握手」（ロシアメディア）

プーチン氏が前回米国を訪れたのは 10 年前。ウクライナに侵攻した 2022 年以降、同氏は多くの首脳から孤立した。

大半の西側諸国から入国を拒まれ、国際刑事裁判所（I C C）から逮捕状が発行される脅威にまで直面した（アラスカが首脳会談に理想的な場所だったのは、米国が I C C に加盟していないことも理由の一つだ）。

2022 年 2 月の特別軍事作戦以降続いたプーチン氏の疎外感には搭乗機がアンカレジに着陸した時点で終わりを告げた。

レッドカーペットを敷き、戦闘機による儀礼飛行を行い、米大統領自ら称賛の言葉を掛ける中、プーチン氏は孤立状態を脱した。

笑顔で挨拶を交わす両氏の姿を、ロシアの国営テレビは「歴史的な握手」と歓迎した。

「ロシアは孤立していると 3 年間みんなに言い続けていたが、今日、米国でロシア大統領のために敷かれた美しいレッドカーペットを彼らは目にした」とロシア外務省報道官マリア・ザハロワ氏は談話した。

○ 「協議進展、妥結の可能性も高い」（トランプ氏）

トランプ氏は冒頭の記者会見で、「会談は極めて建設的で、多くの点で合意に至った」「残されている問題はほんの数点だ。さほど重要ではないものもある。

恐らく一つは最も重要な問題だが、妥結の可能性が極めて高い。今回は妥結に至らなかったが、妥結できる可能性は非常に高い」と曖昧に語った。

この続きについて「次はモスクワで」と、プーチン氏は引き取った。

（編集者のコメント＝トランプ氏がいう妥結の可能性は、必ずしも「停戦のみ」を想定していたのではない。このことは帰路の搭乗機の電話会議で判明した）

○ プーチン氏とトランプ氏は「停戦」の言葉を封印

15日トランプ氏とプーチン氏は、首脳会談後のニュース・コンファレンスに臨んだ（米CNN記事）。

最初に、プーチン氏は5分間演説を行った（下線は編集者）：

「トランプ大統領と私は非常に良好かつ実務的で、信頼に基づく関係を築いた。この道を進めばウクライナにおける紛争の終結に至ることができる、それは早ければ早いほど良いと確信している」

「ロシアと米国の間で4年間、首脳会談が行われていなかったのは周知の事実だ。これは長い時間だ。この間、二国間関係は非常に困難な状況にあり、率直に言って、冷戦以来最低の水準に落ち込んでいる。これは両国にとっても、世界全体にとっても利益にならないと思う」

「2022年トランプ氏が大統領であれば、ウクライナでの戦争は起きなかっただろう」

次にトランプ氏は3分間で次のとおり演説した：

「米露会談は、極めて建設的な会談で、多くの点で合意に至った」

「妥結には至らなかったが、妥結できる可能性は非常に高い」

「間もなく北大西洋条約機構（NATO）に電話する」

「ゼレンスキー氏にも電話して、今日の会談について伝える。究極的には彼らの判断次第だ」

（編集者：両大統領は、「停戦」について触れなかった）

○ 「領土割譲」について詳細語らず

トランプ氏はFOXニュースの取材に対して、領土割譲が実現すれば、引き換えにウクライナの安全に保証を与えることについて、「今は大半で合意している」と述べるに留め、詳細を明かさなかった。

領土割譲とはBBC（英公共放送）によれば、ロシア軍が実効支配している地域を含みクリミア半島などを指す（地図参照）。



プーチン氏がトランプ氏との会談で、ウクライナ東部の割譲を条件として提示したと報じた。

なお、プーチン氏は、「領土の相互交換でウクライナと合意ができれば、プーチン氏は戦争を終わらせ、ウクライナのさらなる地域の占領を試みず、他国を攻撃しないと約束する用意がある」と語った（AXIOS 記事）。プーチン氏は、ゼレンス

キー氏と NATO 首脳らに対してそのように発言を行ったという印象を自分は受けた（ウィトコフ氏）。

○ 石油制裁の緩和問題にも含み

トランプ大統領は、会談後に FOX ニュースに対し、ロシアに対する新たな石油制裁措置（インドや中国に対する二次制裁を含み）は、今後数週間は検討の対象外になるだろうと語った。二次関税に一定の猶予を与える措置に発展するようにインドなどの輸入国側は要求するだろう。

またもしウクライナ戦争が和平実現のステージにアップすれば、石油制裁（二次関税を含めて）の緩和をまずロシアは当然要求するだろう。

○ 結び

米国の最精鋭の戦闘機群とレッドカーペット、そして壁に貼られた「和平の追求」という希望に満ちた友好ムードのなか、トランプ氏はプーチン氏をアラスカに迎えた。しかし、会談は突然あっけなく終了した。会談は失敗だった——そのようなムードが世界に溢れた。

日本では、「米ロ首脳、停戦へ進展なし」（17 日付け朝日新聞の朝刊トップ）や「ロシアは東部割譲が停戦条件」（日経）といった記事が目立つ。

しかし、本号冒頭のとおり、停戦協議を超えて「和平（の協議）を追求する」というトランプ氏の本来の提案がワシントンに戻る「エアフォースワン」から世界に発信された。

ウクライナ戦争をめぐる状況は新たなステージに入った。18 日にはゼレンスキー氏はワシントンに飛びトランプ氏と会談する予定。ウクライナ情勢は 2022 年以来の大きな転機を迎える。

15 日午前（日本時間 16 日未明）、CNN の生番組で米露首脳会談を在宅でモニターしながら、歴史の転換を確認した（現在日本時間 17 日午後 7 時執筆）。■